

の英語教育について概観し、とりわけ教科専任制をとっているベトナムの小学校英語教育について、子どもや授業の様子を踏まえて補足し、日本の外

国語としての英語教育の進め方について提言したい。

大学における異世代交流教育授業の効果

子ども学部 林 薫・金田 利子

本研究は、家庭科における異世代交流教育授業が、次の親世代である大学生にとって、食事づくり力形成に有効であるのか検討することを目的とした。近年の小児の食に関する問題にはいくつかの要因が挙げられるが、その中でも大きく影響を及ぼしているのは子どもの置かれている生活環境、食環境、そして子ども自身の食に対する認識である。子どもは受身の存在でもあり、その認識は親や保育者が作り出す環境に強い影響を受ける。言い換えれば、子どもの年齢が低ければ低いほど、ほとんどの場合、子どもは家庭や施設の中での選択肢から何を選ぶしかない。家庭の子育て機能が低下する中で、親世代の食事作りに必要な知識・技術の低下、食を通じたコミュニケーションの場の減少などが危惧される。そこで、次の親世代である大学生を対象として、食事づくり力形成についての検討をおこなった。

本学では「地域に開かれた大学」をめざし、学生と教員が中心となり、2004年度から学内で子育て

て広場を展開している。子育て広場では、大学内の地域施設を利用し、学生が子どもと遊び、保護者や高齢者、障がいのある人たちと触れ合いを経験する場として展開され、学生と教員、地域のNPOが協力して企画・運営を行い、現在では参加・目的別に7種「あそぼうかい」、「世代間交流広場」、「白梅幼稚園ひよこの会」、「子どもの広場」、「紅茶の会」、「子育て広場さらら」、「気になる子の広場」が開催されている。今回は「あそぼうかい」での取り組みとなった。この中で、家庭科を選択している学生42名を対象とし、2006年10月から12月にかけて実践し、「お茶会」を通して、大学生の食態度の変化を検討した。また子育て広場に参加している子育て中の世代、地域の高齢者についてはアンケート調査を行った。

今回の取り組みを通し、大学において異世代交流教育授業が次の親世代の食事づくり力形成に有効であることが示唆されたが、本調査は現在も継続中であり、今後さらに検討を行う予定である。

「だれもがともにサポーター」プロジェクト

福祉援助学科 山路 憲 夫

発達障害児や気になる子どもたちが保育現場で増えているが、それに対応できる人材養成が立ち遅れている。白梅として、そうした保育ニーズの

高い人材を養成するために、国立精神神経センターを中心とした地域の医療機関、発達障害児を支援するNPO、親の会と協働して、ニーズを的確に